

木下杢太郎全集

第三卷

木下李太郎全集 第三卷

第三回配本(全二十四卷)

一九八一年七月二〇日 発行

定価 三七〇〇円

著 者 太 田 正 雄^{おお たら まさ おお}

発行者 緑 川 亨

〒100 東京都千代田区一ツ橋二五五
発行所 緑 川 書 店

電話 〇三(三三)四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・三秀舎 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 太田元吉 1981

目 次

南蠻寺門前	一
燈臺直下	三九
溫 室	七三
醫師下オバンの首	一五
印度王と太子	一五三
實驗時代	二〇一
和泉屋染物店	三〇一
夜	三三九
十一人の偏盲	三六三
繪 踏 長崎殉教奇談	四〇九

天竺德兵衛昔物語

四三

後記

四四

南蠻寺門前
(樂劇一幕三景)

登場人物

童子順禮等

千代

常丸

菊枝

老いたる男及び行人二三

うかれ男

舞妓白萩

伊留満喜三郎

學頭

所化長順

所化乗圓、其他學僧

老いたる侍

永祿末年のこと。但し風俗は必ずしも史實に據らず、却つて今人の眼に親しうするものとす。秋の

日、薄暮。後景は京都四條坊なる南蠻寺なんばんじの高き石垣。その中ほどよりやゝ上手に寄りて門。その扉開かれてあり。門内の廣場に木立そを透きて仄かに高堂見ゆ。門前の街道に童子等集る。

第一景

童子等
(唄。)

夕やけ小やけ。

摩訶陀まかだの池の

さんしよの魚は

きらきら光る。

玻璃びいどろのふらすこ、

ちんたの酒は

きらきら光る。

鐘が鳴る。鐘が鳴る。

寺の御堂みだうの

十字の金かねは

きらきら光る。

(年少き姉妹の順禮御詠歌うたひながら下手より登場。姉なるは盲目なり)

姉の順禮 (程よき所に立止り、もの怪しむ氣はひ) 何やら怪しい音がするがのう。この近くに海でもあ

るかいのう。

妹の順禮 何の、姉や。京の都には海があるもんかの。

姉の順禮 そんなら河の音か。そや無けりや風かいのう。わしや滅相草臥れた。今日の宿はまだか

いなあ。

妹の順禮 そやつて姉や。嚮からまだ一里とも來やせぬわ。

姉の順禮 何處ぞで歌うたふ聲が聞えるやうやのう。

妹の順禮 姉や。此處は立派な寺やندの。何様ぢや知らぬけれども拜んで行かうよ。

姉の順禮 さうかいな。お寺ならば善う拜んで行かうのう。

(姉妹は門内を覗ふ)

妹の順禮 何ていふお寺やろ。遠くに立派な御堂さまが見えるわかいよ。

姉の順禮 ああ、わしも一目見たいのう。

妹の順禮 や。姉や。烏が。姉や。はれ烏があんなに來たよ。——お日様がもうお隠れやるかいな。

——西の天が赤なつた。はれ、血のやうに赤なつたわ。姉や。烏が仰山來た。寺の屋根へ留つたわ。はれ、屋根が青うく光つて來た。海のやうに光つて來たわ。

姉の順禮 何ていふお寺かいなあ。

妹の順禮 これ、そこな兒よ。この御堂は何といふお寺かいの。

第一の童子 (蔑むがごとき貌にて。)名など知らぬわ。

妹の順禮 和子は知らぬかいな。

第二の童子 おらも知らぬわ。ははははは。

妹の順禮 ほほ、此土地に棲んで居やるのに、名も知らぬとは賢い子等やの。

第一の童子 此御寺の名を知るものは京中にはおぢやらぬわ。たつて知りたくば中の伴天連に聞いて來やれ。ははははは。

妹の順禮 我等は他國のものやほどに教へてくれいのう。

第一の童子 このお寺は唯のお寺ではあらない。

妹の順禮 唯のお寺や無いとて坊様が住むお寺やろがな。

第一の童子 その坊様は眞の人間ではあらない。

妹の順禮 ほほ。眞の人間で無いのなら、そんなら天狗様かいのう。

第一の童子 いやいや、天狗様でもあらぬ。もつと怪しいものぢや。

妹の順禮 分つた。そんなら、そりや狸やるが。

第一の童子 狸でもおぢやらぬわい。

妹の順禮 お時どのよ。もう早う行かうよ。わしも奈何やら氣味わるうなつて來た。

第一の童子 この寺の方丈様は、おらはまだ見ないが、皆のいふて居ることにや、髮の毛が鼠の毛で、手の爪が熊の爪ぢや。

第二の童子 それで身の丈が一丈をも越えて、手の甲に鱗が生えておぢやるさうぢや。

第一の童子 其くせ聲は鳩のやうで、ぐはう、ぐはう、ぐはうと啼く稀有な方丈様ぢや。

(日かげ傾く。南蠻寺の鐘鳴りはじむ)

第一の童子 あれ鐘がなる。鐘がなる。皆早う去のうよ。——お主達も早う去なないと、見よ、今に南蠻寺の門に食はれるぞよ。恐いぞ、恐いぞ。昨日も一昨日も人が食はれたさうぢや。皆去のうよ。去のうよ。

妹の順禮 お時どのよ。我等も早う行かうよ。

(皆々退場。暫く素舞臺。遠くにて再び夕やけの唄)

(千代「年わかき母」、その子常丸下手より物語りつつ登場)

常丸 そんなら、その黒い魚は何處に棲んでゐるのぢやえ。

千代 人の心の臓の中に居るのぢや。

常丸 それが奈何して外へ出るのぢやらうな。

千代 その黒い魚には羽が生えて、鳥よりも速う、空へ飛んでゆくといふことぢや。

常丸 それから奈何するのぢやえ。

千代 河ぢやろが、山ぢやろが、海ぢやろが、日輪ぢやろが、何處へでも飛んでゆくのぢや。その

魚が空を蔽へば、日も曇つて、天の森に赤兒が泣く。

常丸 空に奈何して赤兒が泣くのぢやえ。

千代 遠い、遠い、父様や、ばば様、ぢぢ様の國に行きたいといふて泣く。

常丸 父さまの國にえ？——母様、父様の國は空天竺におぢやるのかいなあ。

千代 空の、空の、大空の、夜摩の國といふところに、ぢぢ様も、父様も、また死んだ其方の妹も、みんな仲よう暮しておぢやると最勝寺様が申された。

常丸 かか様、何といふ國ぢやつたかな。

千代 かか様も善うは知らぬが、夜摩の國とか申された。

常丸 その夜摩の國に私も行きたいわいな。

千代 あれ滅相な、滅相なこと。その國にはな、四つの眼のある恐ろしい犬が居て、小さい子供には行かれぬ所ぢや。

常丸 (歩み滞りながら) 私や其國に行きたいわいな。

千代 これ常丸。そのやうに聞きわけ無うては、もはや何處へも連れてゆかぬぞや。あれ、入日にも間近いさうな。急いで歸らうよ。

常丸 その四つの眼の犬とは、どのやうに恐ろしいものぢやえ。

千代 まあさ、その話は後で詳うするさかいに、早く行かうよ。

常丸 母様、今日のお會式は面白うおぢやつたのう。私やあのやうに面白うおぢやつたのは、生れ時から今日が始めてぢや。私やまだ見ておぢやりたかつたのに、私や家へ歸るはいやぢや。

千代 まあ、此の子としたことが——そのやうな事いふものは、あの恐ろしい犬めが拉つてゆくぞや。家ではばばさまが待つておぢやらう程に、早う歸らうわいな。

(母なる人の友、菊枝、上手より來りてこの母子に摩れちがふ)

菊枝 はれ、待ちやれのう。お前は千代さまではおぢやらぬかいな。

千代 あれ、これは菊枝さまさうな。異な所でお遇ひました。

菊枝 お前は何處からお歸りぢや。

千代 今日是最勝寺さまの御會式ぢやさかいに、死んだ娘と、この子の父御の供養しに参じまらした。郷の母様が強う止めるゆゑ、つひ遅うなつて、今歸るところぢや、してお前は何處からぢやえ。

菊枝 さて其事ぢや、妾はな。近ごろ大い苦勞をしまらした。それ、お前も存じての黒谷の加門様の妹娘のことぢやが。あの娘が氣がふれてな。

千代 さて、さて。

菊枝 ぎざぎざと針を植ゑたる金具もて、われとわが胸を十字に搔い傷つけ……。

千代 さて、さて。

菊枝 その揚句には親達も、男子、女子の見さかい無う切り付くるのぢや。

常丸 ほんまかえ。ほんまかえ。ほんまに嘘ではおらないと云ふのぢやな。……何ぢや。もつとも

つと面白い處ぢやてや。いや夫れは嘘ぢやらうわ。私が今日見た地獄の機關より、もつと面白いものは唐天竺にも決しておりないわ。……何、秋でも冬でも牡丹の花が咲いておりやるてや。え。われら父上も、あの可愛い、妹も生きておりやるてや。……眞白い象も棲んでおりやるてや。嘘ぢや。……何、ほんまぢや。そんなら起請か、懸もするてや。好し、天も地も照覽あれ、

指かけ小かけ、嘘云ふものは手の指腐され、好し、そんなら入つて見よう。嘘ぢややら、指十本腐るぞよ。……(常丸門内に入る。二人の女氣付かず)

千代 おう、それはとつと怪いことぢや。今年は何やら可厭な年ぢや。出来秋ぢや、出来秋ぢやと云うては米は不作。

菊枝 それにまた加茂川の大水。——妾の隣の祖母様は、きつい朝起きぢやが、この三月が程は、毎朝毎朝、一番鶏も啼かぬ間に怪い鳥の啼聲を空に聞くといふし、また人の噂では、先頃攝津住吉の地震強く、社の松が數多く倒れたといふこと……。

千代 ほんまに氣味のわるいことでおりやるのう。あれ、また話で時を費いた。妾は今日は急ぐほどに、是で御免蒙りまらせうず。お前も精々體を大事にしや。命あつての物種ぢやのう。さらばまたの日にお會ひまをさう。

菊枝 それなら祖母さまにも好う言傳言うてたもれや。

(二人相別る。菊枝は下手より退場。忽ち千代けたたましく)

千代 はれ、まあ、常丸。常丸。……はて、常丸としたことが。やよ、常丸。常丸。——(ふらふらと門に歩み寄り、内を覗ひながら)はて悪いことをば致いた。ここが南蠻寺の門ぢやとは、つひぞ

氣付かいでおぢやつたが……さてはこの門めが、中に引込んだと見ゆるよ……。

(千代。逡巡^{たふら}ひながら二三歩門内に進み入り。「常丸、常丸」と呼ばふ。答なし。憂はしげに再び門外に出づ)

千代 四邊^{あたり}には人も見えぬ。はて奈何^{どう}したものであらうぞ。中に入るのも心もとなし……。

(思付きたるさまに、急ぎ門より離れ來り、往來に立ち止まり、下手の方を呼ばふ)

千代 おおい、おおい。先にゆく菊枝どのいのう。菊枝どのいのう……はれ聞えぬげな。(蹣^{つまつ}くが如く、二足三足下手の方に歩みよりて)おおい、おおい。菊枝どのいのう。(右手を擧^あげて磨^さぐ)あ、やうやう聞えたさうな。やれ、うれしや。のう、のう、菊枝どのいのう。早^{はや}う、早う菊枝どのいのう。

(此時老いたる男下手より來りてこのさまを怪しむ貌)

老いたる男 やいの、其方^{そなた}はけたたましう何を呼ばふのぢや。(額に手を翳して、下手の方を眺めやり、

また此方^{こなた}を向きて)何が起つたのぢや。

千代 われら。われら……われら常丸が拉^{さら}はれておぢやつた。

老いたる男 何ぢや。何が拉はれたてや。

千代 われら常丸ぢや。われら小さい男^{をこ}の子^こぢや。

老いたる男 はて、さて、今時いまどきこの都に鷺の鳥はおぢやるまいと思つたが。

千代 いや鷺の鳥ではおぢやらぬわ。鷺の鳥ではおぢやらぬわ。

老いたる男 鷺の鳥でおぢやらぬなら。手長猿かいのう。

千代 いやいやそれでもおぢやらぬ。

老いたる男 さらばお山の女取めどりでもおぢやつたかいの。

千代 人さらひぢや。人さらひぢや。

老いたる男 何な。人さらひとは近頃面妖なことぢや。何處どこから來て、何の方角に隠れて行つたかの。

千代 (泣きながら)何處どこからも來ぬ。何處へも行かぬ。

老いたる男 其方そなたは泣いて許ばかりおぢやつては、しやほに分わからぬわ。

千代 (大聲にて)あの南蠻寺が拉さらつたのぢや。

(菊枝戻り來る)

菊枝 何ぢや。何ぢや。何ぢや。

千代 南蠻寺がわれら常丸を拉つておぢやつた。

菊枝 はれ! (氣絶す)